

病害虫発生予察情報予報第 1 号

佐賀県農業技術防除センター

I. 予報の概要および各作物の特記事項

作物名	病害虫名	5月の予想発生量		病害虫防除のてびきの記載頁	予報対象の病害虫 (抜粋)
		平年比	前年比		
水稲 (早期・早植え)	いもち病	並	並	126~135 137~142	 いもち病
	ばか苗病	並	並	126~135	
	イネミズゾウムシ	多	多	170-171	
1. 病害虫全般 育苗箱処理剤は、防除効果を確保するため、適正量をむらなく処理する。 2. イネミズゾウムシ 例年、発生が多い地域では、本虫に登録のある箱処理剤を処理する。					
水稲 (普通期)	1. いもち病 普通期水稲については、既存の種子消毒剤にベノミル水和剤を加えた種籾消毒を徹底し、常発地帯では育苗期から防除を行う。また、育苗箱で種籾が露出すると本病が発生しやすいため、覆土を適正に行う。 2. もみ枯細菌病 種子消毒を確実に実施する。さらに苗箱の覆土前にカスガマイシン液剤の散布を行うと有効である。				

作物名	病害虫名 ^{注1)}		5月の予想発生量 ^{注2)}		病害虫防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病害虫 (抜粋)
			平年比	前年比		
タマネギ	べと病	中晩生	多	多	266~268	 べと病
	ポトリチス葉枯症		やや少	並	269	
	ネギアザミウマ		並	多	276	
1. べと病 中晩生品種での本病による被害を抑えるため、定期的な薬剤防除を切れ目なく実施する（平成30年4月25日付け病害虫対策資料第1号参照）						

作物名	病害虫名 ^{注1)}	5月の予想発生量 ^{注2)}		病害虫防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病害虫 (抜粋)
		平年比	前年比		
イチゴ (育苗圃)	ハダニ類	多	やや多	214~215	 うどんこ病
	うどんこ病	多	多	204~206	
	アブラムシ類	並	やや多	219~220	
1. 親株でのハダニ類、うどんこ病、立枯性病害 健全苗を育成するため親株床から薬剤防除を実施する。立枯性病害（炭疽病、萎黄病、疫病）の苗での発生を抑えるため、発病した親株は、発生した子苗とともに見つけ次第除去し、圃場外で適切に処分する。					

作物名	病害虫名 ^{注1)}	5月の予想発生量 ^{注2)}		病害虫防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病害虫 (抜粋)
		平年比	前年比		
キュウリ	べと病	やや少	並	184~185	 ミナミキイロアザミウマ
	うどんこ病	多	やや多	182~183	
	灰色かび病	並	並	185	
	褐斑病	並	並	187~188	
	アザミウマ類	やや多	並	196	
	コナジラミ類	多	多	195~196	
1. ミナミキイロアザミウマ (黄化えそ病)、タバココナジラミ (退緑黄化病) 両害虫はウイルス病を媒介するため、低密度時に薬剤防除を実施する。また、罹病株を認めた場合は早急に除去するとともに、媒介虫を対象とした薬剤防除を実施する。					
トマト	葉かび病	やや多	やや多	222~223	 タバココナジラミ
	灰色かび病	並	並	217~218	
	コナジラミ類	並	並	149~151 225~227	
1. 黄化葉巻病・黄化病 (コナジラミ類) 一部の圃場で発生が見られる。発病株は抜き取り、適切に処分するとともに、圃場内から野外への飛び出しを防ぐため、栽培終了前まで媒介虫であるタバココナジラミの防除を徹底する。					
ナス	すすかび病	やや少	やや少	235~236	 コナジラミ類
	灰色かび病	並	並	234~235	
	アザミウマ類	並	並	160~165 247~248	
	コナジラミ類	やや多	やや多	157~159 248~249	
アスパラガス	茎枯病	並	並	317~318	 ネギアザミウマ
	褐斑病	並	並	318~319	
	斑点病	並	並	318	
	アザミウマ類	多	並	321	
1. 茎枯病、褐斑病、斑点病 薬剤防除を継続する。散布間隔は3週間を目安とし、前年に多発生した圃場や降雨日が続く場合は短縮する。茎枯病の発生を抑えるため、降雨時はサイドビニルを降ろし雨の降り込みを防ぐ。また、発病茎は見つけ次第地際部から切断し圃場外で適切に処分する。					
2. アザミウマ類 若茎及び親茎への寄生や食害による被害を防ぐため、虫見板 (約 20×30cm) への払い落とし (擬葉部を2~3回叩く) により発生頭数を調査し、成虫が1ヶ所当たり3頭以上認められる場合は薬剤防除を行う。					

作物名	病虫害名 ^{注1)}	5月の予想発生量 ^{注2)}		病虫害防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
果樹全般	果樹カメムシ類	多	多	240~243	
	1. 果樹カメムシ類 越冬量が多いため8月までの発生量は平年に比べ多いと予想される。園内をこまめに見回り、発生が認められた場合には薬剤防除を行う。特にこの時期に被害を受けやすいカンキツ（開花期前後）、ナシ、ウメ、モモなどで注意する。（平成30年3月12日付け病虫害対策資料第16号参照）				
カンキツ	そうか病	並	並	210~212	 灰色かび病
	かいよう病	並	並	214~216	
	灰色かび病	やや多	多	216~218	
	ミカンハダニ	やや多	やや少	234~238	
	1. 灰色かび病 落花（果）防止のため満開期～落弁期、傷果防止のため一次落果期を中心に薬剤散布を行う。特に本病が発生しやすい園や着花数が多い園では防除を徹底する。 2. ミカンハダニ 殺ダニ剤に対する抵抗性発達を避けるため、4月～6月下旬はマシン油乳剤の使用を基本とする。ただし、樹勢が低下している樹や着花が少ない樹では、落葉、落果を助長する恐れがあるので、マシン油乳剤の散布を控え、殺ダニ剤散布で対応する。				
ナシ	黒星病	並	並	278~281	
	1. 黒星病 5～6月中旬までの薬剤防除は、原則的に保護殺菌剤を使用する。ただし、長雨等で薬剤散布ができなかった場合はDMI剤を散布する。				
ブドウ	黒とう病	並	並	325~327	
	べと病	並	並	328~330	
1. スピードスプレーヤーによる薬剤散布 全列走行を基本とする。なお、薬液が到達しにくい園周縁部等は手散布などにより、丁寧に散布する。 2. 果粒の汚れ及び果粉の溶脱の防止 袋かけ前（大豆大期）に薬剤防除を行う際は、果粒の汚れ及び果粉の溶脱が少ない薬剤を選定する。					
キウイフルーツ	1. かいよう病 葉の斑点症状（右写真参照）の早期発見に努め、発見した場合は直ちに罹病部位を切除する。また、6月までは感染防止のため <u>すべての園において</u> 、銅水和剤及び抗生物質剤を主体とした <u>定期的な薬剤防除を実施</u> する。なお、幼木は成木に比べ発病しやすいため、薬剤防除を徹底する。				 葉の斑点症状

作物名	病虫害名 ^{注1)}	5月の予想発生量 ^{注2)}		病虫害防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
茶	カンザワハダニ	多	並	407~408	 カンザワハダニ
	クワシロカイガラムシ	多	多	414~415	
	チャノキイロアザミウマ	多	やや多	413~414	
	チャノミドリヒメヨコバイ	やや多	多	412~413	
	チャノホソガ	多	多	410	
<p>1. カンザワハダニ 被覆栽培はカンザワハダニの発生を助長する傾向にあるため、一番茶の摘採が遅い園では圃場観察を徹底し、農薬の使用基準に注意して防除を行う。また、一番茶摘採後においても本種の発生が見られる園では追加防除を実施する。</p> <p>2. クワシロカイガラムシ 幼虫ふ化期は5月中~下旬頃である。園内の発生ふ化状況を観察し、ふ化最盛期に防除を実施する。</p> <p>3. チャトゲコナジラミ 第一世代若齢幼虫の発生期となる5月中~下旬頃にクワシロカイガラムシと同時防除を行う。</p> <p>4. ナガチャコガネ 羽化期~成虫発生初期にあたる二番茶の萌芽開葉初期(5月下旬~6月中旬頃)が、防除適期であるため、発生圃場では薬剤防除を実施する。</p>					

注1) 病虫害名に網掛けをしたものについては、予報の根拠とした内容を記載しています。

注2) 予想発生量については、平年および前年との比較により記載しているため、実際の発生量とは相違を生じる場合があります。例えば、例年の発生量が少ない病虫害について「平年および前年より多い」と予想した場合であっても、実際の発生量は多くない場合があります。

注3) 防除対策については「[佐賀県病虫害防除のてびき](#)」も参照してください。

II. 予報の内容・根拠等について

予報内容（来月の予想発生量）

- 平年（過去 10 年間）及び前年と比較し「少、やや少、並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
なお、少発生が予想される病害虫等については、予報の概要のみの記載となる場合があります。

予報内容の根拠

- 農業技術防除センターが実施する県内各地での調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生現況、気象予報からみた病害虫の発生条件等を基に、関係者による発生予察会議で決定します。
- 発生現況および気象条件が来月の病害虫の発生に及ぼす影響については、(－)：少発生、(－～±)：やや少発生、(±)：並発生、(±～＋)：やや多発生、(＋)：多発生として示しています。

防除上注意すべき事項

- 各病害虫を防除する上で特に注意すべき事項等を記載しています。なお、全般的な防除対策については「県防除のてびき」をご参照ください（1 ページの予報の概要にリンク有り）。

写真

- 1～4 ページ目：予報で対象とした病害虫を抜粋して掲載しています。
6 ページ目以降：定期調査時の各作物の生育状況を掲載しています。

5 月の気象条件

- 病害虫の発生に関与する 5 月の気象条件については、福岡管区気象台発表の 3 ヶ月予報（平成 30 年 4 月 25 日）を基に、「気温：平年より高い」、「降水量：平年よりやや少ない」と判断しています。

気象予報による要素別確率(%)及び病害虫の発生に関与する気象条件

要素	3 ヶ月予報における 5 月の気象予報（確率予報%）			病害虫の発生に関与する気象条件（平年比）
	低い(少ない)	平年並 (佐賀市の平年値)	高い(多い)	
気温	20	30 (19.5℃)	50	高い
降水量	30	30 (156 mm)	40	並

Ⅲ. 5月の予報

水稻（早期・早植え）

定期調査4月20日
（早期6圃場）



定期調査の圃場の様子

1. いもち病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 前年の穂いもちの発生状況

平成29年の穂いもちの発生株率は、上場地域の早期水稻（8月上旬）で2.3%（平年4.9%）、北部山間の早植え水稻（9月上旬）で0%（平年11.8%）、普通期水稻（10月上旬）で23.2%（平年14.3%）であり、早期、早植えは平年よりやや少なかったものの、普通期は平年よりやや多く、多発生した圃場もみられた。一部の普通期水稻で発生が多かったものの、圃場等での菌密度は平年並と考えられる。〈±〉

(2) 5月の気象予報

並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 水田周辺に放置された予備苗から葉いもちが蔓延することがあるので、補植後は早急に取り除く。
- (2) 苗いもちがみられたら、早急に取り除くとともに防除を行う。
- (3) その他については、特記事項を参照する。

2. イネミズゾウムシ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

発生時期：平年より早い（前年より早い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 越冬密度

昨年の発生は平年並であり、越冬密度は平年並と考えられる。〈±〉

② 定期調査

被害株率0%（平年0.5%、前年0%）

平年比：並〈±〉 前年比：並〈±〉

(2) 5月の気象予報

気温が高く、多発生の条件である。また越冬成虫の本田飛び込みの時期は平年より早いと予想される〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 越冬成虫は4月中旬～6月上旬に水田へ侵入する。本田での発生状況の把握に努め、成虫が10株当たり5頭以上みられたら、粒剤を散布する。
- (2) その他については、特記事項を参照する。

タマネギ

定期調査：18 圃場
(早生 8 圃場、中晩生 10 圃場)
調査日：4 月 20～23 日



定期調査圃場の様子(露地中生)

1. ベと病(中晩生)

- 1) 予報の内容
発生量：平年より多い(前年より多い)
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ① 定期調査(図1参照)
発生株率：34.9%(平年14.1%、前年0.55%)
平年比：やや多(±~+)、前年比：多(+)
 - (2) 5月の気象予報
並発生の条件(±)
 - (2) 5月の気象予報
並発生の条件(±)
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 対策資料第1号を参照する。

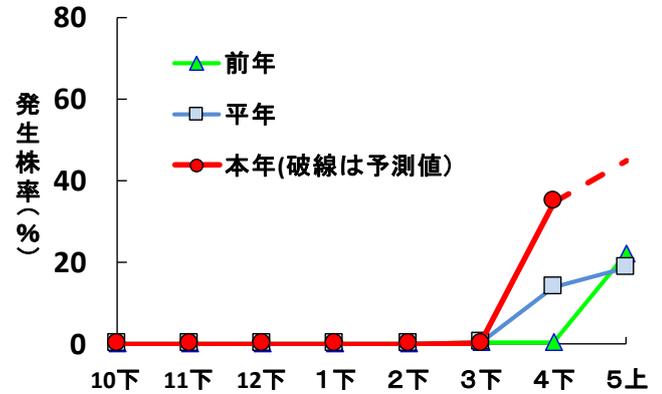


図1 中晩生タマネギでのべと病の発生推移

2. ボトリチス葉枯症

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや少ない(前年並)
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ① 定期調査(図1参照)
発生株率：0.1%(平年13.5%、前年0%)
平年比：やや少(-~±) 前年比：並(±)
 - (2) 5月の気象予報
並発生の条件(±)
 - (2) 5月の気象予報
並発生の条件(±)
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 発生を認めた場合には、速やかに薬剤防除を実施する。

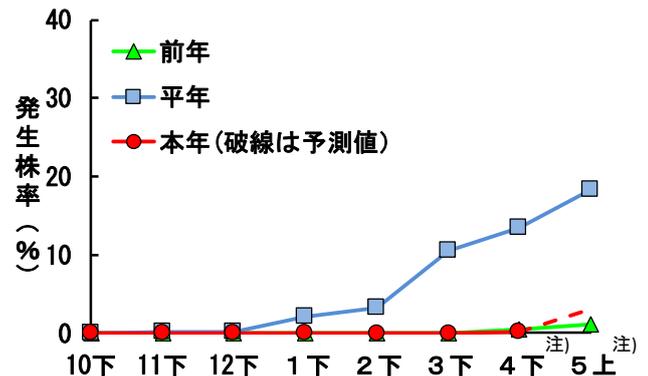


図1 タマネギボトリチス葉枯症の発生推移
注)4月下旬以降は、中・晩生品種を中心に調査

3. ネギアザミウマ

- 1) 予報の内容
発生量：平年並(前年より多い)
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ① 定期調査(図1参照)
発生株率：4.2%(平年17.7%、前年1.4%)
平年比：やや少(-~±) 前年比：並(±)
 - (2) 5月の気象予報
気温は平年より高く、多発生の条件(+)
 - (2) 5月の気象予報
気温は平年より高く、多発生の条件(+)
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 低密度時に薬剤防除を実施する。

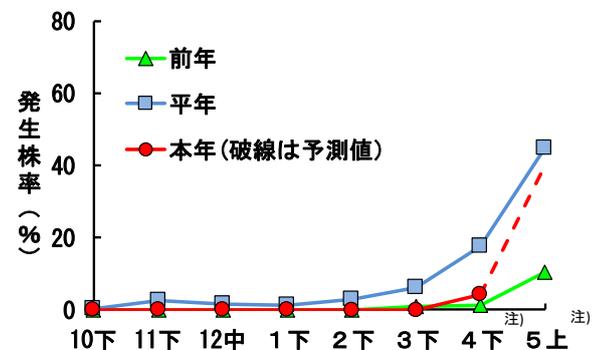


図1 ネギアザミウマのタマネギでの発生推移
注)4月下旬以降は、中・晩生品種を中心に調査

イチゴ（本圃）

農技防調査：11 圃場
調査日：4月20日～23日



1. ハダニ類

1) 予報の内容
発生量：平年より多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：0.8%（平年2.3%、前年1.3%）

平年比：並<±> 前年比：並<±>

(2)5月の気象予報

気温が平年より高く、多発生の条件<+>

3) 防除上注意すべき事項

(1) 圃場によりハダニ類の薬剤感受性が異なるため、防除効果を確認し、薬剤を選定する。

(2) 薬剤防除の際は、下葉や葉裏まで薬液が付着するように十分量を丁寧に散布する

定期調査圃場の様子

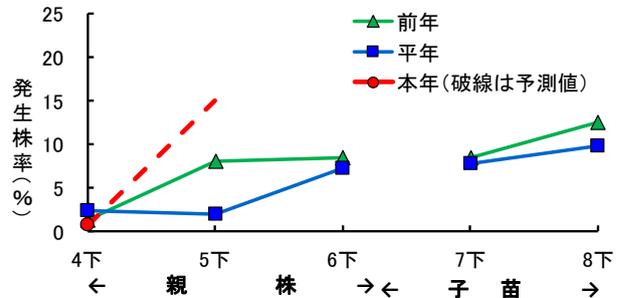


図1 ハダニ類のイチゴでの発生推移

2. うどんこ病

1) 予報の内容
発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1)発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：13.6%（平年5.2%、前年2.2%）

平年比：多<+> 前年比：多<+>

(2)5月の気象予報

降水量は平年並で、並発生の条件<±>

3) 防除上注意すべき事項

(1) 親株での薬剤防除を徹底する。

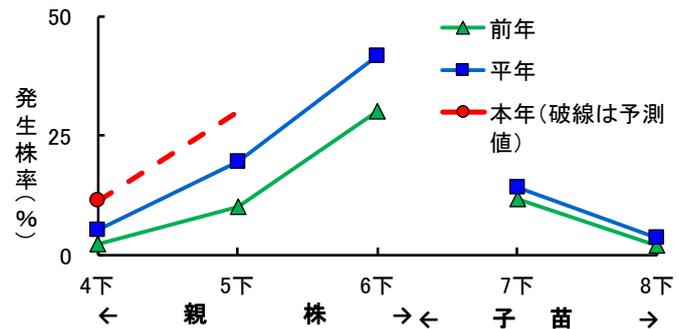


図1 イチゴうどんこ病の発生推移

キュウリ（半促成）

農技防調査：8 圃場
調査日：4月20日～23日



1. うどんこ病

1) 予報の内容
発生量：平年より多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1)発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：19.4%（平年9.4%、前年20.0%）

平年比：多<+> 前年比：並<±>

(2)5月の気象予報

気温が平年より高く、降水量は平年並で、並発生の条件<±>

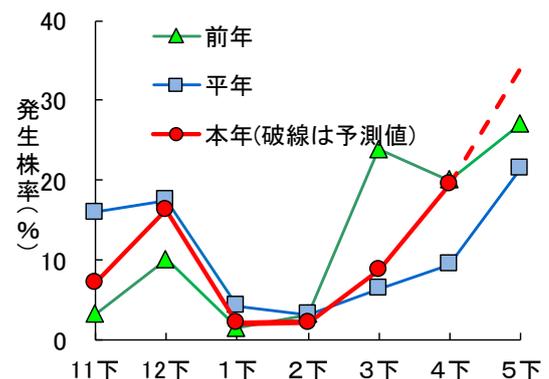


図1 キュウリうどんこ病の発生推移

- 3) 防除上注意すべき事項
 (1) 発生圃場では、定期的な薬剤防除を行う。

2. アザミウマ類

- 1) 予報の内容
 発生量：平年よりやや多い（前年並）
- 2) 予報の根拠
 (1) 発生の現況
 ①定期調査（図1参照）
 発生株率：5.6%（平年10.1%、前年8.6%）
 平年比：やや少く（～±） 前年比：並く（±）
- (2) 5月の気象予報
 気温が平年より高く、多発生の条件（+）
- 3) 防除上注意すべき事項
 (1) 特記事項を参照。

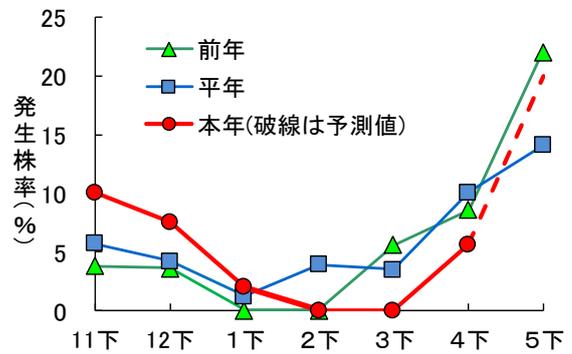


図1 アザミウマ類のキュウリでの発生推移

3. コナジラミ類

- 1) 予報の内容
 発生量：平年より多い（前年より多い）
- 2) 予報の根拠
 (1) 発生の現況
 ①定期調査（図1参照）
 発生株率：0%（平年0.6%、前年0%）
 平年比：並く（±） 前年比：並く（±）
- (2) 5月の気象予報
 気温が平年より高く、多発生の条件（+）
- 3) 防除上注意すべき事項
 (1) 特記事項を参照。

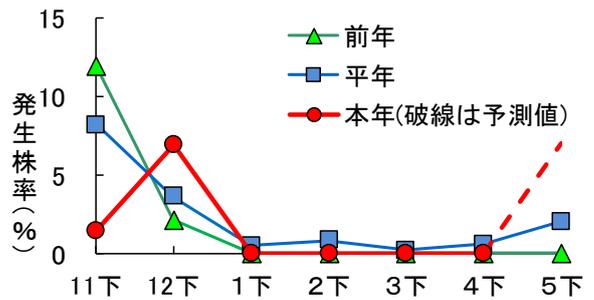


図1 コナジラミ類のキュウリでの発生推移

トマト 定期調査（8圃場）
 調査日：4月20日～24日



定期調査圃場の様子

1. 葉かび病

- 1) 予報の内容
 発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）
- 2) 予報の根拠
 (1) 発生の現況
 ①定期調査（図1参照）
 発生株率：14.4%（平年7.9%、前年6.3%）
 平年比：やや多く（±～+） 前年比：多く（+）
- (2) 5月の気象予報
 並発生の条件（±）
- 3) 防除上注意すべき事項
 (1) 特記事項参照

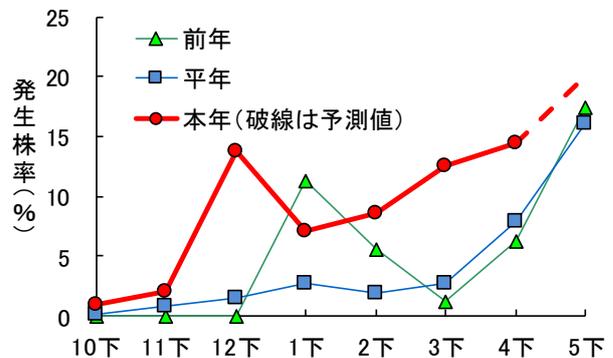


図1 トマト葉かび病の発生推移

2. コナジラミ類

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1 参照）

発生株率：3.1%（平年5.6%、前年8.1%）

平年比：やや少（-～±） 前年比：少（-）

(2) 5月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項参照

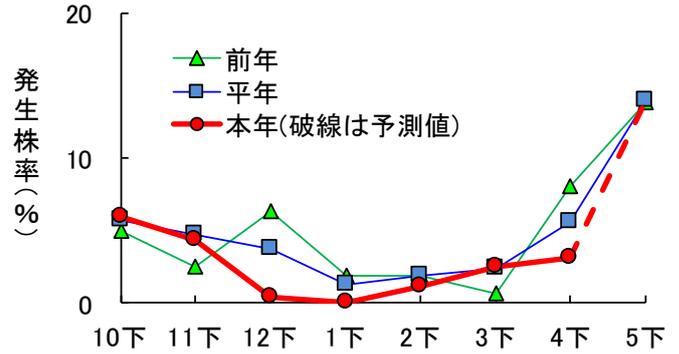


図1 コナジラミ類のトマトでの発生推移

ナス（促成）

定期調査（7圃場）

調査日：4月17～23日

1. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1 参照）

発生株率0%（平年10.2%、前年19.3%）

平年比：少（-） 前年比：少（-）

(2) 5月の気象予報

気温が平年より高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 葉裏や下位葉にも薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



定期調査圃場の様子

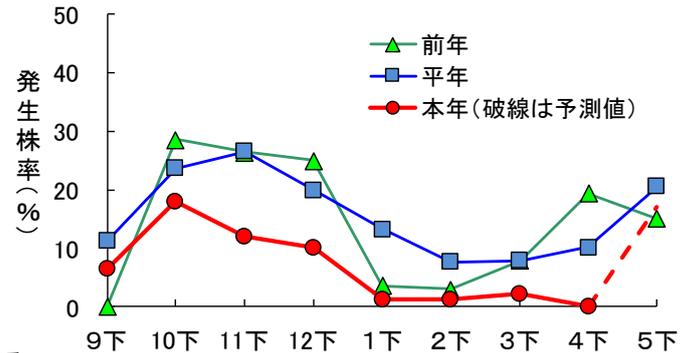


図1 アザミウマ類のナスでの発生推移

2. コナジラミ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1 参照）

発生株率2.9%（平年10.7%、前年8.6%）

平年比：やや少（-～±） 前年比：やや少（-～±）

(2) 5月の気象予報

気温が平年より高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 葉裏や下位葉にも薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

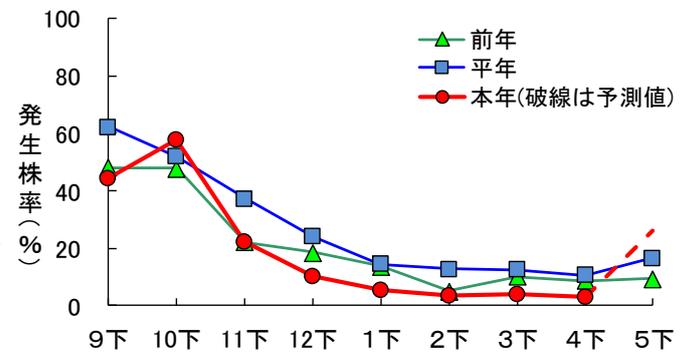


図1 コナジラミ類のナスでの発生推移

アスパラガス

定期調査 (8 圃場)
調査日 : 4 月 20 日~24 日



1. 茎枯病

- 1) 予報の内容
発生量 : 平年並 (前年並)
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ① 定期調査 (図 1 参照)
発生株率 : 0% (平年 0%、前年 0.1%)
平年比 : 並 (±)
前年比 : やや少 (一~±)
 - (2) 5 月の気象予報
並発生の条件 (±~+)
 - (2) 5 月の気象予報
並発生の条件 (±~+)
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 特記事項を参照。

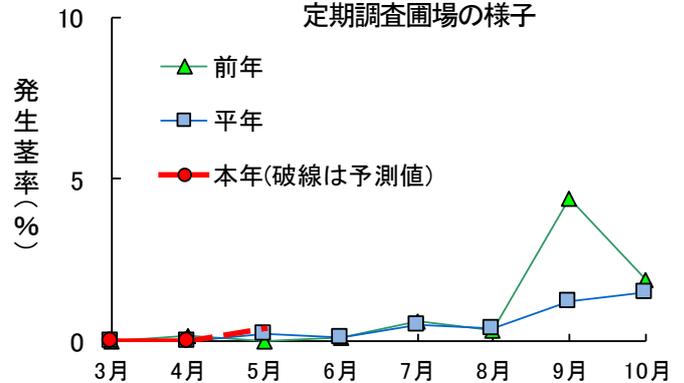


図1 アスパラガス茎枯病の発生推移

2. アザミウマ類

- 1) 予報の内容
発生量 : 平年より多い (前年並)
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ① 定期調査 (図 1 参照)
発生株率 : 15.6% (平年 9.8%、前年 12.2%)
平年比 : 並 (±) 前年比 : 並 (±)
 - (2) 5 月の気象予報
気温が高く、多発生の条件 (+)
 - (2) 5 月の気象予報
気温が高く、多発生の条件 (+)
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 特記事項を参照。

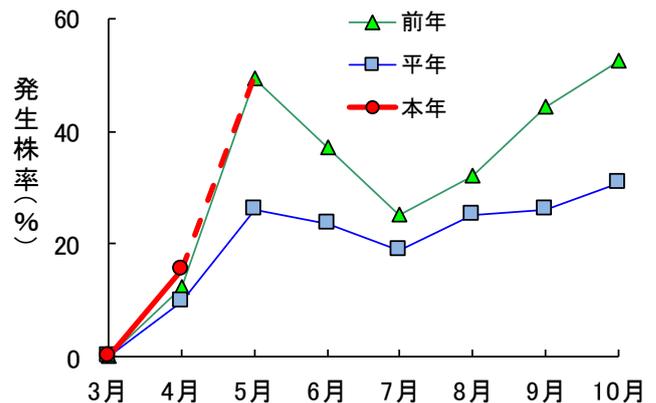


図1 アザミウマ類のアスパラガスでの発生推移

果樹全般

定期調査 : 8 圃場
調査日 : 4 月 17~23 日

1. カメムシ類

- 1) 予報の内容 (4 月~8 月上旬)
発生量 : 平年より多い (前年より多い)
- 2) 予報の根拠
 - (1) チャバネアオカメムシの越冬状況調査 (詳細は、平成 30 年 3 月 12 日付け病害虫対策資料第 16 号参照)
 - ① 越冬地点率 : 68.2% (平年 37.7%、前年 18.2%)
平年比 : 多 (+) 前年比 : 多 (+)
 - ② 平均越冬虫数 : 0.67 頭/m² (平年 0.23 頭/m²、前年 0.14 頭/m²)
平年比 : 多 (+) 前年比 : 多 (+)
 - (2) 5 月の気象予報
気温が高く、カメムシの飛来が多くなると予想される (±~+)
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 特記事項を参照。

カンキツ

定期調査：8 圃場
調査日：4 月 17～23 日



定期調査圃場の様子

1. そうか病

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年並）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①定期調査（図 1 参照）
発生葉率：0%（平年 0%、前年 0%）
平年比：並（±） 前年比：並（±）
 - (2) 5 月の気象予報
並発生の条件（±）
 - 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 果実への感染を防止するため、落弁期に防除を行う。
 - (2) 果実に薬害を生じる場合があるため、落弁期以降にデランフロアブルとマシン油乳剤の混用又は近接散布は行わない。

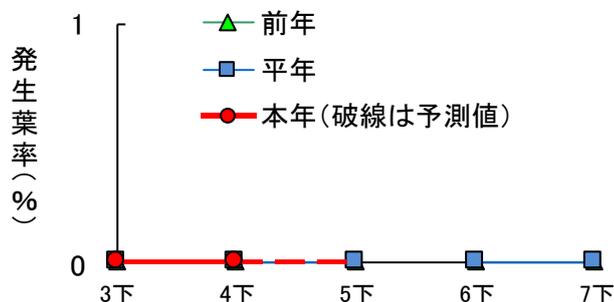


図1 カンキツそうか病の発生推移

注) 5月下旬までは旧葉を調査

2. かいよう病

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年並）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①定期調査（図 1 参照）
発生葉率：0%（平年 0.3%、前年 0%）
平年比：並（±） 前年比：並（±）
 - (2) 5 月の気象予報
並発生の条件（±）
 - 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 前年に発生した園や風当たりが強い園、罹病性品種（ネーブル、はるみ等）の植栽園、新梢の伸長が遅くまで続く園（幼木園、高接園、隔年交互結実栽培園等）では、無機銅剤水和剤（クレフノン 200 倍加用）または IC ボルドー66D（アピオン E1,000 倍加用）で定期的に防除を行う。散布間隔の目安はクレフノン 200 倍加用無機銅水和剤で 20～25 日で、IC ボルドー66D の場合は 30 日とする。
 - (2) IC ボルドー66D は、展葉期に単剤で散布すると、葉に石灰による薬害が発生するので、散布する際はアピオン E1,000 倍を必ず加用する。

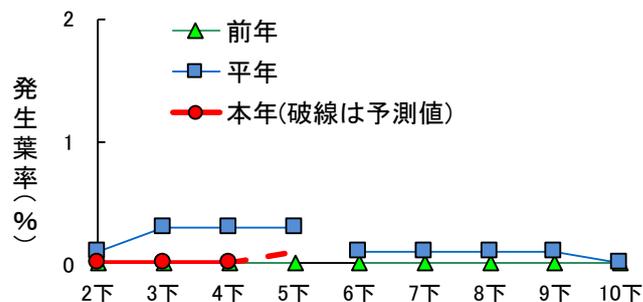


図1 カンキツかいよう病の発生推移

注) 5月下旬までは旧葉を調査

3. 灰色かび病

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い（前年より多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 5 月の気象予報
並発生の条件（±）
 - (2) 温州みかんの着花状況
本年は着花数が多く、本病の発生に好適な条件となっている（+）
- 3) 防除上注意すべき事項

- (1) 古い花卉は発生源となるため、樹や枝をゆすって人為的に落とす。
- (2) その他は特記事項を参照する。

4. ミカンハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや少ない）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生葉率：0.5%（平年5.1%、前年12.6%）

平年比：やや少（-〜±） 前年比：少（-）

(2) 5月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

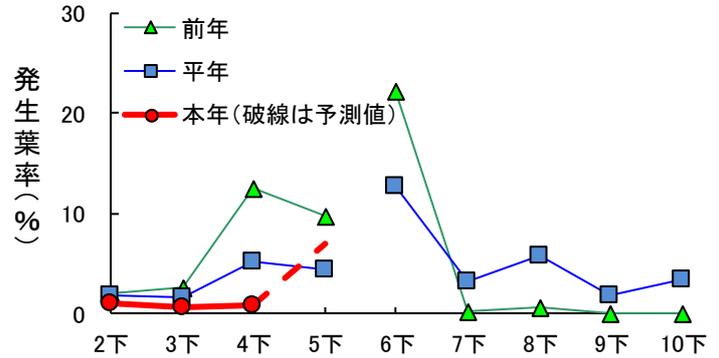


図1 ミカンハダニのカンキツでの発生推移

注) 5月下旬までは旧葉を調査

ナシ

定期調査（6圃場）

調査日：4月19日

1. 黒星病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1、2参照）

発生葉率：0%（平年0.0%、前年0%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

発生果率：0%（平年0.1%、前年0%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）



定期調査圃場の様子

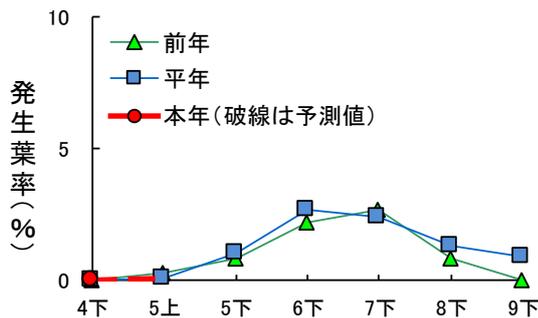


図1 ナシ黒星病（葉）の発生推移

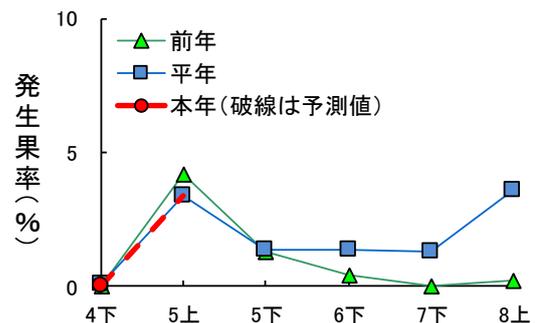


図2 ナシ黒星病（果実）の発生推移

(2) 主要感染期である開花期前後（本年4月1〜20日）の気象（伊万里市のアメダスデータ）

平均気温は平年よりやや高いが、降雨量は平年よりやや少なく、並発生の条件で推移したと考えられる（±）

平均気温：15.3℃（平年13.2℃、前年15.0℃） 降雨量：108mm（平年121mm、前年244mm）

(3) 5月の気象予報

並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

ブドウ

定期調査 (6 圃場)
調査日 : 4 月 17~20 日



定期調査圃場の様子

1. 黒とう病

1) 予報の内容

発生量 : 平年並 (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生葉率 : 0% (平年 0%、前年 0%)

平年比 : 並 (±) 前年比 : 並 (±)

(2) 5 月の気象予報

並発生の条件 (±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 罹病枝の剪除と巻きひげの処分を徹底する。

(2) 新梢・新葉への感染を防ぐため、萌芽期~新梢伸長期に防除を行う。

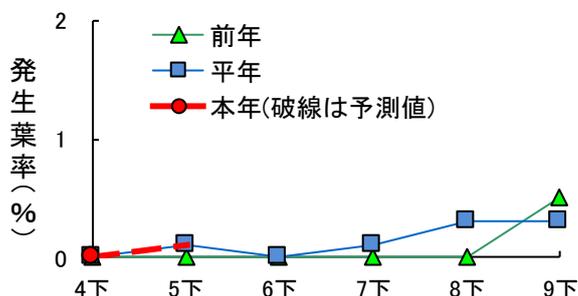


図1 ブドウ黒とう病の発生推移

2. ベと病

1) 予報の内容

発生量 : 平年並 (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生葉率 : 0% (平年 0%、前年 0%)

平年比 : 並 (±) 前年比 : 並 (±)

(2) 5 月の気象予報

並発生の条件 (±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 罹病葉は伝染源となるため、必ず除去し、園外に持ち出して適切に処分する。

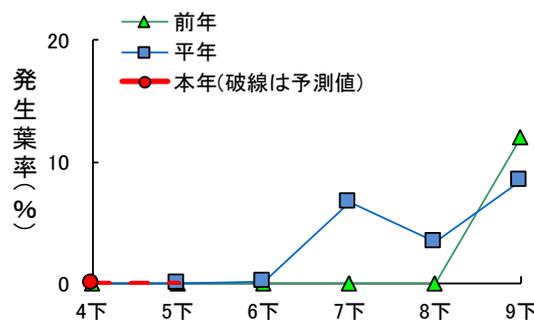


図1 ブドウべと病の発生推移

茶

定期調査 : 7 圃場
調査日 : 4 月 17~20 日



定期調査圃場の様子

1. カンザワハダニ

1) 予報の内容

発生量 : 平年より多い (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生葉率 : 3.0% (平年 4.2%、前年 4.0%)

平年比 : 並 (±) 前年比 : 並 (±)

(2) 5 月の気象予報

気温が平年より高く、多発生の条件 (+)

3) 防除上注意すべき事項

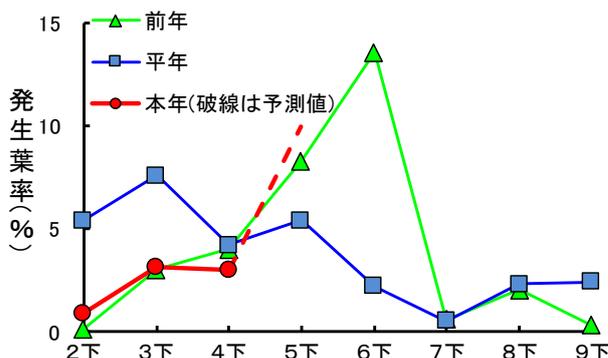


図1 カンザワハダニの茶での発生推移

- (1) 生息部位である葉裏へ薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一薬剤は年一回の使用とする。
- (3) その他は特記事項を参照。

2. クワシロカイガラムシ

- 1) 予報の内容
発生量：平年より多い（前年よりやや多い）

- 2) 予報の根拠

- (1) 発生の現況

- ① 定期調査（雌成虫を対象に調査）

発生圃場率は71.4%、寄生株率は19.3%（±）

図1は雄繭の発生推移を示している、雄繭は5月より調査実施予定。雌成虫の発生圃場では今後、第一世代の幼虫が増加すると考えられる。

- (2) 5月の気象予報

気温が平年より高く、多発生の条件（+）

- 3) 防除上注意すべき事項

- (1) 特記事項を参照。

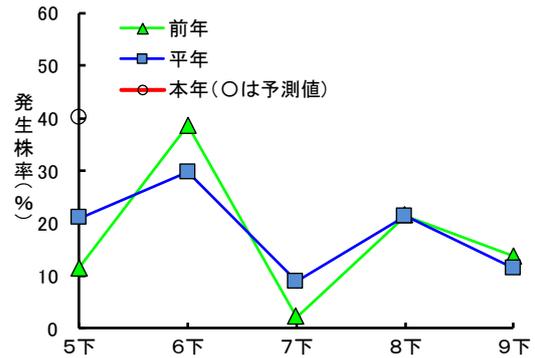


図1 クワシロカイガラムシ(雄繭)の茶での発生推移

3. チャノキイロアザミウマ

- 1) 予報の内容
発生量：平年より多い（前年よりやや多い）

- 2) 予報の根拠

- (1) 発生の現況

- ① 定期調査（図1参照）

虫数：0.9頭/4ヶ所（平年2.0頭、前年1.1頭）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

- (2) 5月の気象予報

気温が平年より高く、多発生の条件（+）

- 3) 防除上注意すべき事項

- (1) 5月中～下旬にかけて発生が増加するため、一番茶摘採後、二番茶萌芽～開葉初期の防除を徹底する。
- (2) 幼虫は葉裏に生息することが多いため、葉裏へ薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。
- (3) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

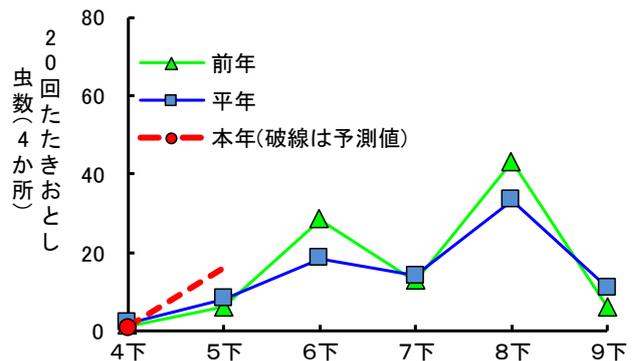


図1 チャノキイロアザミウマの茶での発生推移

4. チャノミドリヒメヨコバイ

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い（前年より多い）

- 2) 予報の根拠

- (1) 発生の現況

- ① 定期調査（図1参照）

虫数：0頭/4ヶ所（平年0.3頭、前年0.4頭）

平年比：やや少（-～±） 前年比：やや少（-～±）

- (2) 5月の気象予報

気温が平年より高く、多発生の条件（+）

- 3) 防除上注意すべき事項

- (1) 5月中～下旬にかけて発生が増加するため、一番茶摘採後、二番茶萌芽～開葉初期の防除を徹底する。

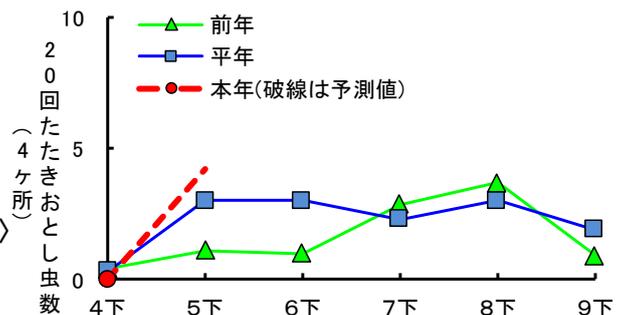


図1 チャノミドリヒメヨコバイの茶での発生推移

- (2) 幼虫は葉裏に生息することが多いため、葉裏へ薬剤が十分にかかるように丁寧に散布する。
- (3) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

5. チャノホソガ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照、H30より4月調査追加）

被害葉数：0枚/m²

②フェロモントラップ（図2参照）

平年比：並（±） 前年比：やや少（-〜±）

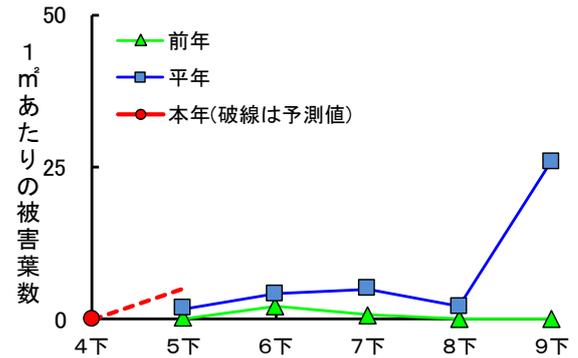


図1 チャノホソガの被害葉数の推移

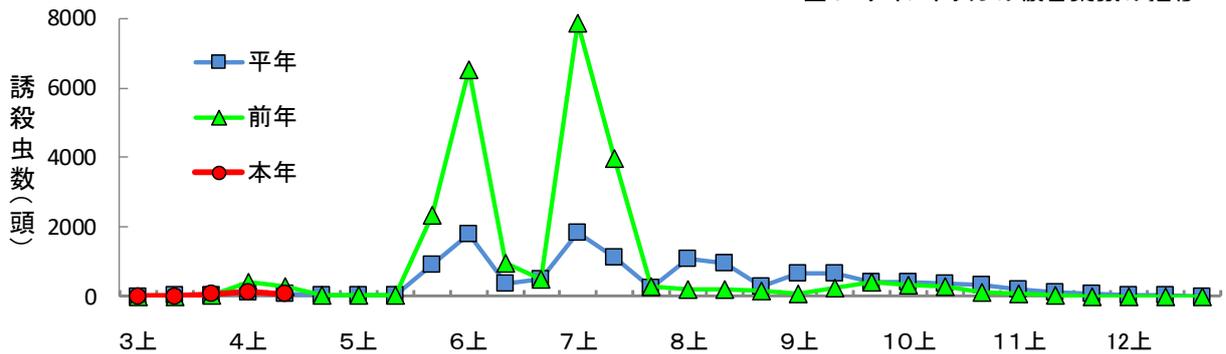


図2 フェロモントラップによるチャノホソガの旬別誘殺数の推移
（嬉野市嬉野町、茶業試験場調査）

(2) 5月の気象予報

気温が平年より高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 新葉展開期に防除を実施する。特に、発蛾最盛期から1週間後頃が適期となるのでこの時期に確実に防除を実施する。

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病害虫防除部
〒840 - 2205 佐賀市川副町南里 1088
TEL (0952) 45 - 8153 FAX (0952) 45 - 5085
Mail nougyougijutsu@pref.saga.lg.jp